



写真左から、教務運営グループ長・野櫻慎二先生、入試広報委員長・中村洋士先生、進路指導グループ長・佐々木綱衛先生。

「生徒指導が大変な学校」が、国際バカロレア認定校へ

強みの生徒指導を起点に段階的に進めた 生徒も教員もワクワク・チャレンジを続ける学校づくり

学習指導要領の改訂を機に
強みを活かした改革に着手

普通科と工業技術科を設置し、地域の多様な生徒が通う三浦学苑高校。十数年前まで「生徒指導が大変な学校」だったが、今や活発な探究活動と国際バカロレア教育（IB）で知られている。なぜこれほどの変貌を遂げることができたのか。その軌跡を辿ってみよう。

同校が改革への第一歩を踏み出したのは2001年のことだ。当時、多くの生徒は「卒業証書がもらえればいい」との意識で生活や服装が乱れ、授業の成立は困難。教員にも「どうせ何をやっても無駄」と諦めムードがあった。野櫻慎二先生は「本校の教員であることを人に胸を張って言えなかった」という。

そんな状況を変えていこうと、03年度の学習指導要領改訂のために発足した新カリキュラム検討委員会が動き始めた。「学習指導要領改訂をきっかけとし、学校全体が本来どうあるべきかから見直したかった」と、メンバーとな

った野櫻先生は振り返る。

まずは現状を客観的に見つめるため、同校の印象について校内外にアンケートを実施。その厳しい評価を使って改革が急務であることを示し、教員に理解を求めた。また、同校の強みが生徒指導にあることを確認し、この点を軸として改革に着手した。

「当時の生徒指導は教員個人の力量、裁量で行っていましたが、統一的な指導方針と基準を作り、組織的な指導の体制を整備しました」（野櫻先生）

周囲の意識を変えるには
まず「自分が変わる」

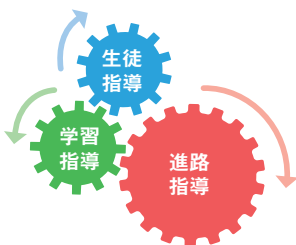
改革の滑り出しは決して順調とは言えなかった。委員会が改革の必要性や提案を発信するが、変化や新しいことへの教員の反発や負担感が大きな壁となった。野櫻先生は書籍や外部ワークショップに打開策を求め、ある一節に出合ったことが転機になったという。「それは『自分が変われば相手も変わる』ということ。なぜ理解してくれない

図1 三浦学苑高校 改革のステップ

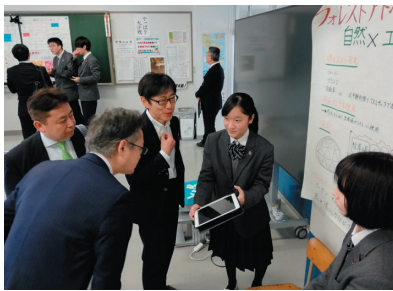


のかと責めるのではなく、相手が理解しやすく説明するよう、自分のやり方を変えてみることにしたのです」
そんなアプローチの変化が改革を軌道に乗せたと、中村洋士先生は考える。「何かしなければいけないという思いはあっても、形にできない先生が多かった。

図2 三浦学苑高校の改革イメージ



強みである生徒指導から始めた改革が、学習指導や進路指導を効果的に動かした。



経済産業省「未来の教室」に採択された、観光ビッグデータを使って地域の観光政策を立案する探究型学習に取り組む特進コースの生徒。



国語の授業での取組を発展させ、生徒主体で地域課題を議論するイベントを開催。外部から約200人が参加。「もっと学校を地域に開いていきたい」と佐々木先生。

生徒指導が落ち着き、各分掌の活性化が進んできたとき、同校が取り組んでいるのは「本校は何を目指すのか」という学校の原点に立ち返ることだ。「学校全体としてバランスよく改革を続けるための

「進学実績」ではなく「主体的な学習者の育成」に軸足

さらに加速させていった。未決定が半数に減少。やればできるという手応えが、各分掌の取組の充実を

根拠を示す資料を作り、理論立てて対話を重ねることで、先生方の共感を引き出し、徐々に賛同者や協力者が増えていったように感じます」

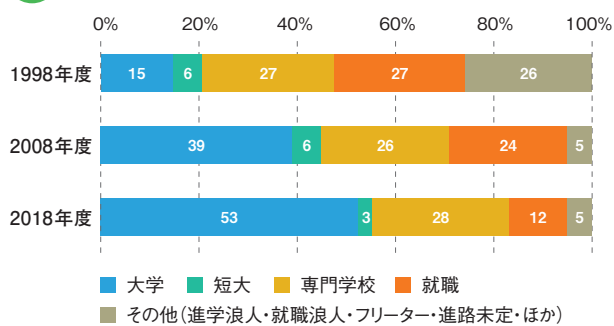
こうして生徒指導を起点とし、授業

規律の徹底や講習会の整備などの教科指導の強化、そして将来の目標を意識させる進路指導の強化へと改革の歯車を回していった。改革1年目に入

学した学年の卒業時進路状況では、例年100人前後いたフリーターや進路

未決定が半数に減少。やればできるという手応えが、各分掌の取組の充実をさらに加速させていった。

図3 進路状況の推移



指針となるものが必要だった(野櫻先生)。古い資料を紐解き、古参の教員にヒアリングし、埋もれていた建学の精神を「質実剛健」「自主独立」という2語に集約して学校全体で共有。これを具現化するために何が必要かという視点から、改革を進めるようになった。そのなかで建学の精神に通じる、主体的な学習者の育成を掲げて13年に立ち上げたのが、「特進コース」だった。「勉強量を増やすことで進学実績は上がりました。しかし、高校時代に主体性を十分育てられなかった生徒が、卒業後に何をしたいかわからなくなつて大学を中退したり、就職に向けて動けなかつたりしているのを知り、それまでのやり方に疑問をもつようになつ

IBの教育方針を活用し 教員の意識改革を加速

20年度、同校は新たなフェーズに入

たのです。学校と家の往復ばかりの生徒たち。閉じられた学びを社会に開いていきたい、社会の中で自ら気づき行動する学びの場を充実させたいと考えようになりました(野櫻先生) 社会の課題や企業からのミッションに取り組み探究プログラムや、経済産業省「未来の教室」を活用した地域の観光政策を立案するプロジェクトなどを次々導入。教科学習にも積極的に探究活動を取り入れてきた。さらに、特進コースで成果があがった探究プログラムを他のコースでも導入するなど、学校全体にも広がっている。生徒は関心のあるテーマの外部イベントがあれば自ら参加するようになり、課外活動として地域の魅力発信に取り組むグループも出てきた。

特進コースの新しい学びの立ち上げに、佐々木綱衛先生は強い思いをもって取り組んできたという。

「私が教員になったのは、自分の軸をもった主体性のある生徒を育てたかったから。それにはまず、自分がそう行動できる人であろうと、新しいことにも挑戦してきました。生徒が校内外で活動的になることで、生徒自身が成長するのはもちろん、地域を元気にすることもできる。その感触が、次のチャレンジへの原動力になっています」

た。地域に根差した国際人の育成を目標とする「IBコース」がスタートしたのだ。

「校内外で活動する機会が充実し、生徒の主体性が向上してきましたが、

『結局、受験勉強すればいいんでしょ?』という意識が根強くある。それを、探究・協働・概念理解を重視するIB

のプログラムを活用することで変えていきたいと考えたのです。IBコースを

きっかけとして、多くの教員でIB教育の理念と手法を共有し、学校全体の教育を変えていくという波及効果を狙っています(野櫻先生)

こうして、授業の成立すら困難だった学校が、IB認定校になった。改革を牽引してきた一人である中村先生は、

「生徒にとつてより良い環境にしたいという思いがあるから、大変なことも乗り越えることができた。学校が変わっていくのが楽しかった」と振り返る。

10年後の100周年を見据えて、どういう学校を創りたいかを校内で語り合い、言葉を紡ぎ合わせ、「生徒も教員もワクワクする、チャレンジする学校」というキャッチコピーを掲げた同校。

「学校はこういうものだ」という概念を取っ払っていききたい。そのほうが面白い」と、佐々木先生は今後の展望を語る。

「現状に満足した時点で、問題や課題が見えなくなりますが、まだ何かできる

のではないかと。常にその視点をもって自分自身も成長し、変化を楽しんでいきたいですね(野櫻先生)